

学生使節団から協力隊員へ、そして今、再びエル・サルバドルと日本の文化交流を願って

安藤 二葉

1974—76年 青年海外協力隊

私が初めてエル・サルバドルに入国したのは、1973年7月。今尚、伝説的な在日本エル・サルバドル大使：ワルテル・ベネケが企画した「学生使節団」のメンバーに参加してのことだった。

「学生使節団」の旅程は、大韓航空でロスを経由し、メキシコ、グアテマラ、コスタリカを回り、エル・サルバドルに到着。

翌朝、首都サン・サルバドル市の大統領府でアルマンド・モリーナ大統領を表敬。その後はベネケ大使が開発したラ・リベルタ県のリゾート「ATAMI 海岸」での海水浴、コアテペケ湖やイサルコ山を回る楽しい行事が続いた。その後、ホセ・シメオン・カニャス中米大学（UCA）の大学生と交流する等、現地の方々との交流が続く中で、首都の郊外にあった体育師範学校や青少年スポーツ・センターを訪れ、日本から派遣されていた海外青年協力隊員達と出会い、彼等の活動を見学できた。

当時はまだ日本で青年海外協力隊の存在は知られておらず、日本政府が発展途上国へ日本の若者たちを派遣し、途上国の人々と主に現地社会の発展を促す動事業を行っていると分かり、私は素直な感動を覚えた。そして驚いたことに、その隊員たちの中には、現地の国立芸術高校の美術科で油絵や陶芸、グラフィック・デザイン等々を指導しているボランティアが何名かいると分かった。

その一人、デザイン科の教師をしている隊員と出会え、彼が「現在、版画の指導教師がいないので、日本に要請中だ」と、話してくれた。人生で誰もが少なくとも一度は、己の運命を感じるものだが、その時が正に、私が己の人生を自覚した瞬間だった。何という偶然か・・・ 大学時代、美術部に入り浸っていた私は、卒業後に美術家連盟の版画工房の夜間教室に通い、版画技術終了後も版画制作に勤しみ、版画協会展と国画展に入選、その年のCWAJ展にも選抜されていた。



只、当時の私は自分の作品に納得行かぬところがあり、このまま売れるための小奇麗な版画制作を続けていて良いのか？ もっと自身の創作テーマを模索したいと悩んでいた最中だった。私はこの地で、作品作りを開始してみたいと思った。そこで私は美術隊員に、日本から持参していた次作の版画を見せると、彼から「日本に帰ったら協力隊の事務局へ行って、是非協力隊に応募するよう」激励された。

私は帰国後直ぐに、当時広尾にあった JOCV 青年海外協力隊の事務局へ飛び込み、その年の秋の筆記試験と実技試験に合格することが出来た。翌年の春から四カ月間の協力隊訓練を受けることになり、私は身辺整理に励みながら、戦前にメキシコに渡った画家北川民次について、調べ回った。

北川民次は、戦前にニューヨークで絵を学び、革命最中のメキシコに渡り、シケイロス等の壁画運動に参加する。またシティ郊外のトラルパンに



野外美術学校を開き、子供たちに絵を教えた。その子どもたちの絵をメキシコ政府がパリに送り、展覧会を開いたところ、ピカソがその児童画を絶賛し、当時フランスで注目を浴びていた藤田嗣治もその展覧会を見て、感銘を受けた。藤田は、パリから日本へ帰国するに際し、メキシコを訪れ、北川民次と出会い二人は友好を深めた。1936年、日本に一時帰国し、民次は個展を開催、彼のその独自の作風は、当時の日本画壇にインパクトを与えた。しかし当時の日本の軍国主義の潮流の中で、彼は再びメキシコに戻ることは出来ず、不遇の時代を過ごす。戦後、軍国主義の弊害を批判し民主的な教育理念を提唱し、日本の児童美術教育の礎を築いた。



そんな北川民次の理念に共感した私は、1974年(昭和49年)の春から4カ月間の長い協力隊訓練所での研修生活をへて、その年の秋、遂に羽田空港(当時、成田空港はまだ建設中だった)からメキシコ経由で、エル・サルバドルへと飛びたった。

任国到着後の勤務初日、私はサン・ハシント地区の国立芸術高校の美術学部へ、先輩の油絵科を訪れ、美術学部のロベルト・ガリシア学科長から学校内を案内された。

私が2年間勤務することになる版画工房には、真ん中に中程度の大きさの銅版画用プレス機が置かれ、奥の隅に大型のリトグラフ(石版画)用のプレス機もあった。しかし、かなり古い機械のようでガタがきて、圧を掛ける鉄板が少し傾いている。聞くと数年前に古い印刷工場にあった印刷機が不用品となり、この工房に無料で寄贈されたらしい。寄贈と云うより、廃棄処分となった年代物の手刷り印刷機が、この工房に廃棄されたということだろう。

この印刷機を動かせるまでに修理するのが、私の最初の大仕事となった。

幸い、私が版画を習った美術科連盟の工房には刷り師が二人いて、連盟のメンバーの画家から委託された絵をアルミやジンク版に転写し、50枚単位でリトグラフを刷っていた。二人とも一作刷り終わると、プレス機の点検と修理をしていたので、その彼等の姿を思い出しながら、学校の清掃係兼大工の協力を得て、私は何とか前世紀の遺物とも思える工房のプレス機のネジや圧力版の位置を調整し、プレス機を蘇らせることに成功した。

私が担当した生徒は、油絵科の生徒の中で版画技法の習得を希望した6名で、その中にファン・カラシンという名の生徒が素晴らしい描写力を持っていた。私は早くからカラシンを自分の後継者として目を掛け、自分が修得してきた技術と機材を惜しみなく与えた。

生徒の数が少ない分、私は空いた時間を自分の作品作りに回していたが、半年ぐらい過ぎた頃に、学校外から若手の画家たちが私の工房に版画を学びに来るようになり、その中で、実に生意気な若造だったが卓越した腕前の持ち主がいた。名前はアウグスト・クレスピン、彼にリトグラフに技法を教えると、直ぐにシャラクサイほど上手い絵をリト用ジンク版に描き出すので、一緒にその版をリトグラフのプレス機で10枚ほど印刷してやった。するとその刷り上がった10枚のリトグラフを、彼は新聞社や雑誌社の記者たちにばら撒き、自分の名前を売り込んで回ると、若手画家として売り出しに成功した。



斯くして善き生徒たちに恵まれ、版画教師として実に楽しい日々を送り、1年半ほど過ぎた頃だった。当地の新聞の文化欄に、この国の画家ホセ・メヒア・ビデスの作品の写真が掲載され、私の眼がその絵の題名に釘付けになった。「タミジ・キタガワ先生」と題した一人の男の肖像画だった。おそらく、戦前メキシコいた北川民次のことだろうと思った。この作者のホセ・メヒア・ビデスと北川民次との接点とは、いかなるものだったのか？ 北川民次ファンとして直ぐに調べようと思った。



しかし、その頃からエル・サルバドルでは政府の市民に対する弾圧が厳しくなり、反比例して学生や市民の反政府デモが頻発するようになった。芸術高校の自治会室からデモを呼び掛ける放送が流れ、私の教室の生徒たちも私の制止を振り切って、街頭デモへと学校を飛び出して行った。優等生だったファン・カラシンもその一人だった。そんな状況の中で、私の2年の協力隊任期の終了も間近となり、任期を延長すべきか否か、迷っていた。そんな私に、カラシンが「来年この国は大変なことになるだろうから、先生は日本に帰った方が良い」と、言った。決心がつかぬまま、時間ばかりが過ぎ、任期は終了し、1976年12月に帰国。

帰国した翌年1977年、エル・サルバドルで行なわれた大統領選挙に勝利したPCN政権のロメロ大統領が策謀していた不正が発覚し、抗議する市民たちの集会に軍の治安部隊が発砲、200名程の市民が殺害された。怒った若者たちは山へ行き、ゲリラ軍を結成し政府と対立し、やがて紛争は国を二分する内戦に拡大して行った。

私が赴任していた芸術高校は以前から秘密警察にマークされており、1978年閉鎖された。また私に代わって版画工房の主任として学校に勤務していたファン・カラシンも、新入生の生徒たちに版画技法を教えて帰宅後の夜、家族にミーティング（政治集会）に行くと言って家を出て言ったまま、行方不明（ミッシング）となってしまった。

そんな悲報が続く中、私は美術なぞ役に立たぬ職種を教えたりせず、看護師とか農業専門家として協力隊で働きたかったと、悩み続けた。そんな時に、JICAの緊急援助隊から「中南米での大災害を想定したレスキュー隊のスペイン語コーディネーターとして登録するように」と、声を掛けて頂き、即登録した。

コロンビアでのネバード・デル・ルイス火山の被害者救援、象牙海岸でのリベリア難民支援、1986年にはエル・サルバドルで崩壊したスーパーマーケットの下から被災者を探索する東京消防庁のレスキュー・チームの通訳を勤めることが出来、私はコーディネーターと云う分野での新しい職務に充足感を覚えた。



1989年、偶々エル・サルバドルを再訪した際、現地の友人の画家から「老画家のホセ・メヒア・ビデスが日本人に会いたがっている」と誘われ、私は友人に連れられ、画家ビデスの山荘に行く事になった。そこで私は嘗て





Retrato del pintor japonés Jamiji Kitagawa, óleo de José Mejía Vides

新聞紙面で見た「タミジ・キタガワ先生」と題した肖像画を、ビデスから見せて頂いた。

ホセ・メヒア・ビデス画伯は、「若いころにメキシコのサン・カルロス美術学校に留学し、そこで日本人の画家のタミジ・キタガワ先生と出会い、タミジ先生から美術のテクニックを教わるとともに、精神的な影響を受けました。本当に素晴らしい先生で、以来ずっと私はタミジ先生を敬愛し続け、先生を描いたこの肖像画も売らずにずっと手許で大切にしてきました」と言ってから、彼は「先生は今、日本でご存命なのでしょうか？」と、私に尋ねた。

私が記憶する限り、それまで日本で北川民次の訃報を聞いた覚えがなかったので、私は「おそらく、北川民次は日本でご存命のことと思います。日本に戻ったら、貴方のことを北川民次先生にお伝えします」と、約束した。

帰国して、直ぐに愛知県の北川民次の住所を調べ、何とか先生のご自宅にお電話することが出来たが、北川先生の御息が電話国に出られ、「父は現在、高齢で入院し、危篤状態になって、我々家族も心配して居るところです」と、教えて下さった。そして私が中米のエル・サルバドルにいる画家のホセ・メヒア・ビデスのことを伝えると、「そうですか、父は戦後1955年にメキシコを再訪し、昔の生徒たちと再会し、友人たちや生徒たちの名簿を作成しましたが、残念ながら、その方のお名前はリストの中にはありません」とのこと。

その電話の後、数日後に新聞に北川民次の訃報が載った。それから数年後、エル・サルバドルでホセ・メヒア・ビデス画伯も亡くなられたと聞き、何とも心残りだった。

その後ビデス作の北川民次のあの肖像画がどうなったのだろうか？ と、私はずっと気がかりだった。

1992年にエル・サルバドルでは内戦が終結し、その後2007年に遂にエル・サルバドルでFMLN政党が大統領選に勝利し、フネス大統領が誕生。嘗ての国立芸術高校の教え子たちは、現在、サルバドルの国立大学の芸術学部の教授として時代の若者たちを指導している。私が版画を教えたアウグスト・クレスピンも、内戦時代にはコスタリカ、米国のマイアミ、そしてカナダで亡命生活を送りながら、世界で名の通った画家となり、サンチェス・セレン政権下の教育省の芸術部長となった。彼からのE-mailで、「嘗ての芸術高校の美術課長のロベルト・ガリシアがMARTE現代美術館の館長となり、そこにあのホセ・メヒア作の「タミジ・キタガワ先生」の肖像画が展示されている」と、教えてくれた。

そして今年には北川民次の没後30周年。私がエル・サルバドルをこの春に訪れた際に、ロベルト・ガリシアから「ホセ・メヒア・ビデスと彼の先生のタミジ・キタガワ」の展覧会を開催したいとの相談を受けた。勿論、私は二つ返事で協力を申し出た。

この半世紀、実に様々なことが重なり合ってきたが、1930年代に出会った日本の画家北川民次とサルバドルのホセ・メヒア・ビデス画伯の交流の絆が、この地で展示され、両国の友好の証となるだろうと、私は願って止まない。

